



No. 43
[平成25年3月6日]
岡山県総合教育センター
〒716-1241
加賀郡吉備中央町吉川 7545-11
TEL(代) (0866) 56-9101
(特別支援教育部) (0866) 56-9106
<特別支援教育部相談専用電話>
TEL (0866) 56-9117
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

特別支援学校における学習評価を考える

～授業で見せる子どもたちの姿をどのように評価するのか～

今回は、授業づくりの中でも学習評価について考えてみたいと思います。学校での教育活動については、意図をもって展開をしているわけですから、当然、目標を設定し、その目標に沿った評価がなされていきます。このことは、小学校であろうと、中学校であろうと、また、特別支援学校であろうとなんら変わりのないことです。

この学習評価に関して、文部科学省は、平成22年5月に「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」（通知）を出し、学習評価の基本的な考え方を示しています。

障害のある児童生徒に係わる学習評価の考え方として、以下のように表記がなされています。

障害のない児童生徒に対する学習評価の考え方と基本的に変わるものではないが、児童生徒の障害の状態等を十分理解しつつ、様々な方法を用いて、一人一人の学習状況を一層丁寧に把握することが必要であること。また、特別支援学校については、新しい学習指導要領により個別の指導計画の作成が義務付けられたことを踏まえ、当該計画に基づいて行われた学習の状況や学習の結果の評価を行うことが必要である。

このような通知を受け、特別支援学校においても学習評価をどのように考えていけばよいのか、どのような観点が必要なのかなど、学習評価についての関心が高まっているように思います。

〔目標は個別の指導計画から導かれる〕

特別支援学校において、学習評価は、一単位の授業、単元、個別の指導計画に示されている前期及び後期の目標等に対して行われる評価を包括するものと言えます。それらの評価は、各目標に対応しながらなされていくわけですから、目標そのものが曖昧であれば、必然的に評価そのものも曖昧なものになるのは当然と言えます。ですから、特別支援学校で評価を語るには、目標の大本である個別の指導計画に取り上げられている個々の児童生徒の各教科等の目標が適切に設定をされているかどうか、非常に重要なポイントになります。ここで注意しておくことは、個別の指導計画で取り上げている目標は、あくまでも各教科の重点的な目標を取り上げているわけですから、その他にも副次的な目標や下位目標が実際には存在します。個別の指導計画で表記される各教科等の目標は、各教科で示されている内容ごとに、丁寧に実態を把握し、各内容ごとの目標を設定して、それをまとめるという手続きを取ります。しかし、これらの目標すべてを個別の指導計画に表記することは難しいことから、便宜上重点的な目標を取り上げていると言えます。つまり、個別の指導計画の目標の背景には、数多くの教科等の内容に関わる目標が存在しているということを意識し、また、個別の指導計画レベルから、単元レベル、授業レベルへと目標を具体化して、それぞれに対して適切に評価をしていくことが必要です。

〔評価は課題解決の過程を含めて適切に行う〕

それでは、次に実際の評価について、一単位の授業を例に考えてみることにします。授業の評価は、個々の個別目標に基づいて行われますが、個々の目標を評価するためには、各学習活動に対応して設定された学習課題について適切に評価を行っていくことが必要です。小学校等では、各教科の評価の観点として、「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」が示されていますが、特別支援学校における評価についても、前述の文部科学省通知を受け、ここ最近、学習評価を新しい観点に基づいて適切に考えていくことの重要性が認識され、学習指導案にも評価の観点や場面が書き入れられるようになってきました。

評価の意義について、千葉大学の太田正巳氏は、「知的障害教育における学習評価の方法と実際」（全国特別支援学校知的障害教育校長会編著 2011）の中で、授業者である教師の意義として①学習評価を行うことによって、授業者は学習者がどの程度に授業内容を理解し、獲得したか、学習の進み具合を把握することができる。②また、どのような仕方で学習を進めているのかを見ることができるの2点を取り上げています。

ところで、特別支援学校の評価の観点を見てみると、「～することができたかどうか」とか「○、△、×」といった、結果のみを評価する表記がまだ多いように思われます。学習課題ができたか、できなかったかといった結果を評価することも必要ですが、評価は多面的に行われることが必要です。例えば、生活単元学習の授業で、誕生日の買い物に行ったとします。そして、その授業の一学習活動で、Aさんに「分担されたスポンジケーキを探すことができる」といった学習課題を設定したとします。さて、先生方はどのような観点でAさんの学習課題に対する評価を行うのでしょうか？先生方と話していると、実際は学習指導案の中に書かれているような、「できた」「できなかった」といった観点だけで評価は行われていないように思います。つまり、スポンジケーキを店内で探すことができたかどうかという結果のみを評価するのではなく、どのように探すことができたかの、その課題を解決する過程も含めて適切に評価しています。見通しをもたず店内を歩いて、たまたまスポンジケーキを見付けることができたのと、店員さんに場所を聞きながら探したけど結果見付けられなかったのとでは、解決方法に大きな違いがあります。また、書いたメモをポケットから取り出しながら、何を買うのかを確認しながら探したけど結果探すことができなかったのと、「先生、何をかうんじゃったんかな？」と何度も確認して、教師に頼りきって結果探すことができたのとでは、自分の役割を意識するという意味において大きな違いがあります。要は、学習課題に対して児童生徒がどのように取り組んで行ったのかを、複数の評価の観点から多面的に見ていくことが必要です。このような見方をしていくと、授業の課題設定の仕方や指導・支援の改善にも大きくつながっていくのではないのでしょうか。

特別支援学校で学習評価を適切に行っていくためには、小学校等の各教科の評価の観点として示された「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」等を参考にしながら、評価の観点を適切に設定しておくことが必要です。特別支援学校の場合、授業をT・Tで行っている場合が多く、もしかすると評価の観点がそれぞれの教師で違うことも想定されます。ですから、評価の観点のすりあわせが、特に必要ではないのかと思っています。もう一度、各校で学習評価のあり方を考えてみてはどうでしょうか。

(特別支援教育部長 高橋 章二)

＜参考文献＞ 知的障害教育における学習評価の方法と実際

—子どもの確かな成長を目指して—

文部科学省特別支援教育調査官 石塚謙二監修

全国特別支援学校知的障害教育校長会編著 2011